

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 4 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580146

研究課題名(和文) 同時代の喫緊課題に対する文化人類学の<応答>可能性の検討

研究課題名(英文) Searching for anthropology of response-ability In the midst of urgent world situations

研究代表者

清水 展 (Shimizu, Hiromu)

京都大学・東南アジア研究所・教授

研究者番号：70126085

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文化人類学の営みが、フィールドワークと民族誌を通して介入する現地の人々と社会が抱える緊急性の高い問題に対していかなる<応答>性を持ち得てきたかを整理し、文化人類学の社会的な意義を検討してきた。

2年間でのべ8回の研究会を開催し、概念整理および議論の体系化を進めると共に、2冊の成果出版企画を立案した(<応答>のフィールドワーク用語集、および日本の人類学における<応答>の系譜)。
この結果、「応答」性の問われる領域としてフィールド、ホーム、エデュケーションの3つを見込み、応用、アクション、実践、公共などの諸概念との更なる検討を展開する必要性が明らかになり、科研Aを申請し、採択された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this preliminary research is to explore a new field of cultural anthropology in the direction of its "response-ability" to urgent issues in the field as well as in the home.

In the last two years, we held eight seminars to share information and ideas among members, and also invited guest speakers who share similar interests and concerns. Thanks to these seminars, we came to agree to focus our future research in the following three domains, 1. research field site, 2. civil society in the home, 3. education at university.

研究分野：文化人類学

キーワード：応答の人類学 喫緊の課題 フィールド ホーム エデュケーション

1. 研究開始当初の背景

(1) 「応答の人類学」への道のり

本研究を遡れば、2003年に開始された関西学院大学 COE プログラム「人類の幸福に資する社会調査」とその成果『アクション別フィールドワーク入門』(武田・亀井編 2008)、加えて同書を契機に関連の研究会が結びつき広がった、自然発生的な議論の成果としての『支援のフィールドワーク』(亀井・小國・飯嶋編 2011) および関連の学会報告等が、「応答の人類学」と銘打って共同研究を立ち上げる基盤となった。

(2) 日本文化人類学会の課題研究「応答の人類学」(2012-)の試み

上述の経緯を経て、2012年から日本文化人類学会の課題研究懇談会「応答の人類学」(年間予算 10 万円)が発足した。本研究懇談会では、「文化人類学が社会へのいかなる応答性をもちうるか/いかに応答的でありうるか」という問いを共有して議論を深めてきた。本挑戦的萌芽研究は、いわば同研究懇談会の活動を下支えするために申請されたものであり、以下、両者を実態として一体的な研究事業として説明する。

課題研究懇談会発足時には、「災害・開発・医療・福祉といった、緊急対応を迫られる現場から長期的な指針の提示を求められる現場まで、複数の場で模索されてきた協働的な取り組み事例の検討を中心に、人類学の社会的意義を論じる」とし、「応用人類学を典型とする、人類学の応用性、実践性に関する従来の議論を含み込みつつも、<人類学の知を他領域に応用する>という論点に留まるのではなく、フィールドワークと民族誌という人類学の営みそれ自体を、フィールドの人たちを含む同時代の諸関係の中に置き直す具体的な方法について検討」することを指すものであった。これらの活発な議論機会の開催を支えるために、本科研の申請に至った。

2. 研究の目的

申請時に述べた目的は次の通りである。本研究は、文化人類学の営みが、フィールドワークと民族誌をとおして介入する現地の人々と社会が抱える切実な問題に対して、いかなる<応答>性を持ち得てきたのかを整理し、文化人類学の社会的な意義を検討する。

繰り返し対象社会を訪れ、長期滞在して参与観察や聞き取りを行うフィールドワークは、開発・医療・福祉のように、問題群を特定して制度的対応を迫られる現場において、特徴的な関わり方として立ち現れる。また人々の日常的生活世界を紡ぐ民族誌は、同時代のヘゲモニックな言説に対し代替文化の生成装置となる。

本研究では現場で蓄積されてきた協働的な取り組みと民族誌で蓄積されてきた対抗的な取り組みの検討を通じて、現代世界が直面する喫緊課題に対する<応答>としての文化人類学の可能性を展望する。

3. 研究の方法

本研究は、年間を通して研究会の積極的な開催を通じた参加者間の議論をもとに、論点を徐々に明確化してきた。本科研の前段である課題研究懇談会が開始した 2012 年から 2015 年度末まで年間 4 - 6 回のペースで研究会を開催しており、その開催総数は、文化人類学会内での分科会や他研究会との共催を含めれば 25 回に及ぶ(うち、本科研期間 2014-2015 の 2 年間では後半 8 回の研究会が開催された)。

また、全国に分散する本科研メンバー 8 名を含む課題研究懇談会メンバー 32 名の間での情報共有と、議論の深化プロセスを発信する媒体として、参加者の理解と協力を得て、課題研究懇談会発足時に立ち上げたホームページ上で記録を公開してきた。本科研を得てからは、成果発信に直結する記録を蓄積する意味合いも増し、毎回、詳細な議事録を作成し、メンバー間で回覧してレビューを行い、共有データとして、ホームページに掲載するとともに、より詳細な発表情報等は、メンバー間でのみ閲覧可能なクラウド(Dropbox)を整備し、途中から参加した研究者が議論にキャッチアップできる土壌を培ってきた。

このような環境下で、本科研期間を含む 2015 年度末までの 4 年間に、32 名のメンバーの他、発表やコメントなどで 49 名の方々に発表していただいた。結果としては、25 回の研究会の中で 100 回の発表(メンバー 74、非メンバー 26)、44 のコメント(メンバー 23、非メンバー 21)を共有、857 名の参加者を得て議論を進めてきた。

その結果、以下 4. 成果に述べるような、段階的な論点の絞り込みがなされ、理論的かつ実践的に応答を論じていく考察枠組みが形成されるとともに、成果イメージを具体化

させてきた。

4. 研究成果

以下に、研究会当初から現在までの論点の推移を切り口に、本研究の成果を整理する。既述の通り、本研究は先んじて開始された日本文化人類学会課題研究懇談会と一体的に運営されてきたため、成果説明についても両者を区分しない。時系列で見ると、成果(1)の途中までは本研究以前に議論され、一定程度整理された問題をもとに本科研が申請された。その後、成果(1)の言語化および成果(2)が、本科研期間中の主な議論である。

(1) < 応答とは何か > から < 応答する人類学 > へ

研究初期の議論を通じて、< 応答の人類学 > を巡る次のような論点が抽出された。

- ・ 応答の人類学という主題で扱える範囲：「人類学は常に、社会と応答的であり続けてきた」という広義の認識と、「応答を前面に出すことで、これまでの応答的な実践や実態とどう異なるのか」という狭義の指摘との間でいかに折り合いをつけるのか。これについては清水展が述べた「コール&レスポンス call and response」という意味での「応答」がその主なイメージとなってきた。黒人霊歌などにおける歌唱あるいは演奏の楽式、つまりメイン・ボーカルとコーラス隊や聴衆とが呼びかけと応答を繰り返してゆくスタイル、いわゆる「掛け合い」である(cf.清水 2014)。
- ・ 「応答」する主体と相手：具体的には「文化人類学として社会に応答する」のか、それとも「個人が個人に応答する」のかである。
- ・ 「応答」の受動性と積極性：フィールドからの「呼びかけ」を人類学者が待つとすれば「非応答性」も含めることになる。逆に、黙っていても「呼びかけ」がかからない状況や課題もあり、「先んじて応答する」可能性も検討すべきである。
- ・ うまくいく/いかない応答：評価ができるのか。フィールドワークは「計画に沿っていたか否か」とは異なった水準を有し、その観点からの「失敗」経験を誰もが持ち合わせている。重要なのは、それらの経験を資源として生かす文脈を保持もしくは創出することである。
- ・ 学際的な場での「応答」：近接他領域研究者の意見を通じて、フィールドでのタイムスパン、人への関わりへの直接性、順応性、また自らの変化も含めて内省する包括性などが< 人類学の応答 > として照射された。

(2) フィールド/ホーム/エデュケーション

上記のような議論を経る中で、清水展より「『人類学が応答する』には、誰に・何に応答するのか」の問いが出され、検討を重ねた。結果、合意に至り確認したのは、以下の3つのレベルでの応答である。

1つ目はフィールドでの応答である。現地の人々、そこにある問題の当事者や関係者、そこでプロジェクトをする NGO のスタッフ、行政組織の末端の公務員、その他との交流と交渉はフィールドワークの日常生活の一部である。

人類学の調査は、警察や検事のお取り調べとは異なり、調べる側が自らのストーリーに添って聞きたいことを一方的に聞く、のとは正反対である。日々の応答は相互的であり、人類学者の側が尋ねられたり、頼まれたり、求められたりすることが多々ある。フィールドワークのあいだ、個人的で私的な事柄から、当該コミュニティが直面している問題まで、人類学者はさまざまなレベルの悩みや問題、課題などを投げかけられ、それに答えることが期待されていることを確認した。

2つ目にはホームでの応答がある。フィールドワークで得られた情報や知見、それにもとずく学術としての人類学の知識や知恵や提言を、マスメディアをとおして日本社会（納税者）に積極的に行うことは人類学の責務である。梅棹忠夫や中根千枝らの尽力によって人類学が市民権を得てきたのは、社会への積極的な関与と発言によるところが大きい。その初心を再び思い起こし、継承し、発展させてゆく必要があることを確認した。

3つ目は、多くの人類学者にとって、そもそも「人類学をする、したい」という動機は、異文化や他者の理解をとおして、自身を自由にゆくこと、生まれ落ちた文化・社会のなかで作り上げられてきた自己を、unlearning（学びなおし）によって、もう一度作りなおしたいという願望と深く結びついている。それはアンダーソンの言葉を借りれば「ヤシ殻椀の外へ」出る（別の言葉で言えば、「井の中の蛙」であることを自覚して井戸の外に飛び出す）ことによって、広い世界を知り、自身を自由にゆく、解放してゆくことにつながってゆく。

そのことは、人類学者個人の脱構築（解体構築）という以上に、文化人類学が今まで行ってきた自文化の相対化や自文化批判を、さらに継承発展してゆく際にきわめて重要なモメントであることを確認した。すなわち、今までなされてきた文化批判としての人類

学が、ともすれば抽象的な思念の世界で自己完結してきたことを避けるために、人類学者個々人の切実な経験や存在様態に根ざした発想と論理で考えつづけるためである。

人類学をすることが研究者個々人の実存や存在様態と深く結びついていることの確認は、教育の現場において人類学を教えること、学ぶこと、そして実際に応用することが、学生個々人の生を豊かにする可能性があることを確認し、教育の技法についての重要性をメンバーが共有するに至った。

本科研における研究会と議論の積み重ねをとおして、以上の3点を確認するとともに、〈応答〉を総合的に考察する枠組みとして、フィールドでの応答、ホームでの応答、そして上述の3点目をエデュケーションでの応答、という課題として捉えなおし、3つのキーワードを導いた。

この枠組みを見いだせたことで、それを基盤とする中長期的な研究計画立案に取り組み、2016年度科研A「応答の人類学 フィールド、ホーム、エデュケーションにおける学理と技法の探求」に採用された(代表:清水展)。

(3) 今後への展望と残された課題

本研究において網羅的に議論しきれなかった、事例や地域の偏り、あるいは、類する既存概念である応用、実用、アクション、公共、実践、関与などとの理論的検討は、本研究における残された課題として、新規科研を通じて意識的に取り組んでいくことを確認した。

これら課題を十分に認識しつつも、本研究成果として達成されたことの第一は「応答の人類学」を文化人類学の基礎的な領域として設定したこと。第二は、そのトピックの領域をフィールドでの応答、ホームでの応答、エデュケーションでの応答の3つに整理したこと。第三は、文化人類学史と向き合い応答することをおして、過去の先達の体験を同時代の資源とすること、すなわち温故知新の必要性などである。

また方法論上の成果としては、第四に「応答」の具現した実践を著書にしたものを合評する形式を導入したこと。第五に、メンバーの死角を補うために「応答の人類学」の系譜を遡及する一連の講師を招聘したこと。第六に、メンバーを拡張する方法として研究会出席者に発表を求めたこと、などが功を奏して議論の深化が導かれた。

新たに採択された科研Aでは、本研究の成果を踏まえ、「過去の〈応答〉実践の具体的

な事例を **フィールド、ホーム、エデュケーション**の3つの現場に分けて収集・整理・系譜化し、その研究成果を第2、3年度に学会発表するとともに、最終年度までにシリーズ『応答の人類学』全4冊として成果出版する」という具体目標を設定した。向こう5年に渡り、「フィールドとホームで重要課題に取り組む実践的介入の学として文化人類学の再考=再興を試みる」ことを目的として更に実践的、理論的精緻化を目指したい。

<主な参考文献>

清水展 2013『草の根グローバル化セッション 世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学出版会

清水展 2014「応答する人類学」、山下晋司編『公共人類学』東京大学出版会:19-36。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

清水展 「創造的復興とアジア市民社会の形成: フィリピン・ピナトゥボ山噴火で被災したアエタ支援の経験から」、『地域研究』、査読有、2015、Vol.15-1: 104-120

飯嶋秀治「水俣と民族誌 石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』を中心に」、『九州人類学会報』、査読無、2015、第42号: 3-7(<https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=ZGVmYXVsdGRvbWFpbmreXVqaW5rZW58Z3g6MTIyMmExY2FmODFjNTA2ZQ>)

亀井伸孝「アフリカろう者コミュニティによる手話言語研究の促進: フランス語圏西・中部アフリカの事例」、『手話学研究』、査読無、2015、第24巻: 3-16

清水展 「東南アジア研究の現場から「越境」を考える: アセアンの可能性と学際研究の必要性」、『アジア研究』、査読無、2014、第59巻3・4合併号:54-66

Yasunobu ITO, Improving the Effectiveness of Interprofessional Work Teams Using HER-based Data in the Treatment of Chronic Diseases: An Action Research Study, 査読有、2014、Proceedings of PICMET: Infrastructure and Service Integration, 3492-3497

〔学会発表〕(計5件)

Hiromu SHIMIZU, natural Disaster Opened A Space for Social and Human Transformation, 2nd International Conference on ASEAN Affinity: People, Prosperity, Preservation, 2015

飯嶋秀治 「想定外の事態をめぐる応答

性』、日本文化人類学会、2015
関根久雄「多分野における応答性 ダイバーシティ・マネジメント」教育における人類学、日本文化人類学会、2015
亀井伸孝「ブルキナファソろう者社会調査報告：手話の主導権をめぐる政治』、日本アフリカ学会、2015
小國和子「アクションリサーチを通じた相互作用機会の創出：農民による地域固有の持続的灌漑管理実現に向けて』、国際開発学会第25回研究大会、2014

〔図書〕(計5件)

清水展・木村周平(編著)『新しい人間、新しい社会 復興の物語を再創造する』、京都大学学術出版会、2015、390
関根久雄(編)『実践と感情 開発人類学の新展開』春風社、2015、375
小國和子「水管理を巡る人々の価値の行方』、窪田順平(編)『水を分かち』、勉誠出版、2015、326
飯嶋秀治「施設の暴力と人類学』、田嶋誠一(編)『現実に介入しつつ心に関わる展開編』、金剛出版、2015、400
亀井伸孝「障害』、山下晋司(編)『公共人類学』、東京大学出版会、2014、121-137

〔その他〕

ホームページ等

http://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~com_reli/jasca_outou/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水展 (Shimizu Hiromu)
京都大学 東南アジア研究所・教授
研究者番号：70126085

(2) 研究分担者

飯嶋秀治 (Iijima Shuji)
九州大学 人間環境学院・准教授
研究者番号：60452728

(3) 研究分担者

亀井伸孝 (Kamei Nobutaka)
愛知県立大学 外国語学部・准教授
研究者番号：50388724

(4) 研究分担者

小國和子 (Oguni Kazuko)
日本福祉大学 国際福祉開発学部・准教授
研究者番号：20513568

(5) 研究分担者

伊藤泰信 (Itou Yasunobu)
北陸先端科学技術大学院大学・准教授
研究者番号：40369864

(6) 研究分担者

関根久雄 (Sekine Hisao)
筑波大学人文社会系・教授
研究者番号：60283462

(7) 研究分担者

内藤直樹 (Naito Naoki)
徳島大学大学院アーツ・アンド・サイエンス研究部・講師
研究者番号：70467421

(8) 研究分担者

内藤順子 (Naito Junko)
早稲田大学理工学術院・講師
研究者番号：50567295